

## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員(主査) 土佐桂子 印

学位申請者 平田晶子

論文名 「ラオス中部ラオ・トゥンのラム歌唱の民族誌：  
グローバル状況下にみる五感統合とデジタル化をめぐる身体感覚の現在」

### 【要旨】

一般的にワールドミュージックの世界音楽市場では、モーラム歌謡は主にタイとラオスにまたがって居住するラオ系民族の音楽として、いわば民族と1対1で結びつける形で理解され、消費されてきた。それに対して本論文はラオ・トゥン(山腹ラオ)のオーストロアジア語族モン・クメール語系カトゥイック語派ソーの人々によるラム歌謡の音楽実践に着目し、(1)ラム歌謡の音楽家たちが、音楽を通じた経済活動を行ううえでエスニシティというアイデンティティの取捨選択をいかに行うか、(2)調査対象の人びとにとって、ラム歌謡を媒介とする身体的経験がどのようなものであるか、(3)グローバル状況下におけるデジタル化の力と伝統文化の維持とのせめぎ合いのなかで人間の身体感覚がいかに機能するかを考察するものである。

本論文は3部構成で、全8章で構成されている。第1部は、理論的枠組みを示し、グローバル状況下での在来音楽の民族誌的背景を論じている。

第1章では、理論的枠組みと問題意識、研究目的が提示される。既存の民族音楽研究はこれまで上述の通り音楽とエスニック・アイデンティティを不可分の関係とし、前者が後者の維持や形成にいかに重要かを指摘する傾向にあり[Trimillos 1986、Nagel 1994、Stokes 1997]、いわば本質主義的なアプローチを前提としている。それに対して、近年の人類学研究やフェルドの後期研究[Feld 1996, 2000]をもとに、本研究はエスニシティをときに手段的、操作的に用いる視点からとらえ、音楽市場においてはラオ系民族の音楽とされているラム歌謡に対して、一般的には劣位に置かれがちな非ラオ系山地民が、いわば外部のラム歌謡に対しても大きな役割を担う局面を指摘するという独自性を持つ。加えて人類学における「感覚」に関わる近年の研究動向も踏まえ、本論文は、音と旋律に加え、五感を通じた感覚的な身体的経験の多様性を民族誌として描き出すという特徴を有している。

第2章では、調査地サワンナケート県の地理的・歴史的変遷を示し、ラムの担い手たちが暮らす多民族混住地におけるエスニシティ、言語環境、生業、宗教状況について、県の地方史に関する文献資料やフィールドワークで収集した一次資料を用いながら丹念に

記述している。さらに、同県内の調査村の形成史を概観する。村内のラム歌謡の担い手たちは、中央政府が推し進める緩やかな同化政策や法規制整備という現代的状況のなかで、国家権力、階級、複数のエスニシティ、仏教化の流れとローカルな伝統文化とがせめぎあうアリーナで芸能・宗教活動を行っていることが示される。

第2部では、ソーの在来音楽の担い手たちの民族誌的記述とその考察が行われる。

第3章では、こうした山腹ラオのラム歌謡の担い手は、音楽市場では主流である低地ラオ(ラオ・ルム)によるモーラム歌謡の音楽産業社会に対して、公演などを通じて、いかなる戦略をもってラム歌謡を演奏するかが示される。外部に招かれた場合、山腹ラオのラム歌謡名手たちは本来の出自と芸能者としての自己を切り離し、経済活動として、ある種他者の「ラム歌謡」にも従事する。ソーの芸能者は独自の身体的感覚を用いつつ、共同体のバウンダリーを超え、タイ側ラオ系住民に招かれた公演ではむしろ国境を越えた「ラオ」性を強調しつつ、聴衆から「本物」のラム歌謡として受容される状況を作り出すことに成功している。

第4章では調査村で、ラム歌謡の身体的経験を通じて、親族関係を強化し、社会関係を生成する局面に着目する。彼らは民間治療儀礼を通じて、言語やラムの旋律、供物などを感じ、複数の感覚器が刺激し合う身体的経験を有している。こうした身体的経験とは、祖先崇拝を通じて記憶や感情を同時に醸成し、彼ら自身の祖先や帰属への深い感情を強化していると考えられる。

第5章はラム歌謡と感情の関係に着目し、ソーの人びとが、仏教化が進む状況下における祖先崇拝の現状を描く。在来のラム歌謡の音楽的営為を背景として、ソー独自の祖先崇拝の儀礼実践では、多様な音や旋律が用いられる。加えて視覚や味覚や触覚を刺激するような物質が使用され、祖先崇拝そのものが五感のなかで強化されるような、創造的な状況が生じる局面を描き出している。

第6章は、ソーの音楽的行為のなかでも最も多くの旋律が奏でられる精霊儀礼に着目し、儀礼を五感統合を呼び覚ます身体的経験という観点から分析する。儀礼におけるラム歌謡の音楽的営為は、言語、旋律、供物が要とはなっているが、それだけでなく、草花のにおい、玩具なども世界を構成する要素となり、そうした五感資源の統合—視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚—が記憶や感情に強く働きかける状況が儀礼を通じて見いだされることを記述している。

第3部は、グローバル状況下で直面することになったラオ歌謡を享受する側の五感が分断される身体的経験を扱う。

第7章では、村落社会における文脈から離れ、ソーの人びとの在来音楽を CD・VCD 等の形で流通させるデジタル化の文脈から、グローバルミュージックの音楽市場におけるラオ歌謡の状況を描いている。商品化は人びとの音楽の視聴形態を大きく変えてきた。ソーの人びとだけではなく、世界中のラオ・ディアスポラが、在来音楽のデジタル化により、

山腹ラオのラム歌謡をディスプレイ越しのオンライン・コミュニティを通じて鑑賞するようになった。こうした在来音楽の商品化やオンライン・コミュニティ上の鑑賞には、ラム歌謡を視聴するファンやキュレーターの存在が重要である。オンライン・コミュニティ上で浮き彫りとなるエスニシティは、もはや民族というアイデンティティを強調するものではなく、画面越しの視聴覚情報—音や旋律、風景、家屋、食材など—を受け取りながら、既に身体に備わっている五感を装置としながら、音楽を愉しみ、緩やかにつながりを求めるラム歌謡コミュニティ—またはラム歌謡愛好家の社会集団—と呼べる。

第8章では、こうした議論をまとめ、最終的な考察が行われた。すなわち、ソーのラム歌謡の担い手が音楽を通じた経済活動を行ううえでエスニシティというアイデンティティのバウンダリーを戦略的に超え、異なるエスニック集団のなかからラム歌謡を唄う状況を記述し、エスニシティと音楽のつながりを捉えなおした。また、芸能、儀礼、治療等の幅広い営為のなかでラム歌謡、あるいはその旋律を媒介として展開する経験的身体に着目することにより、五感の統合性が持つ新たな意味を考察した。他方では、グローバリゼーションのなかで新たに生じたオンライン・コミュニティに着目し、デジタル化の力と伝統文化の維持とのせめぎ合いという新たな脈絡のなかで、上述の経験的身体の重要性を確認するものである。

## 【審査の概要】

本論文の最終試験は、2021年2月22日に実施された。審査委員会は、土佐桂子(主査)、西井涼子、真島一郎、馬場雄司(外部委員:京都文教大学)、中田友子(外部委員:神戸市外国語大学)の5名により構成された。審査では、平田氏が本論文の概要を説明したのち、各審査委員との間で質疑応答が交わされた。

最終審査では、従来ラム歌謡がラオ民族の歌謡として理解されてきたことに対して、非ラオ系民族であるソーの人々によるラム歌謡の営為に着目することにより、こうした歌謡の担い手たちが、エスニシティのバウンダリーを越え、ときにはタイ側のラオ住民を含む、いわば他者の心を揺さぶる経験を戦略的に生み出せるさまを描いていること、祖先崇拜や精霊信仰を通じて、単に聴覚のみならず五感の統合的経験が共有され、記憶や感情に働きかけるさまを生き生きと描き出したこと、加えて、そうした現地調査を通じて観察してきた芸能がオンライン・コミュニティを通じて享受される状況を含め、新たな経験的身体の生成という観点から考察しようとした点など、ソーの人々の歌謡と歌謡をとりまく文脈を描き出した民族誌的価値が高く評価された。

一方では、問題点も指摘された。例えば、音楽を核にした記述となっているが、本論文の主題でもある父系クラン、リネージといった基本概念の記述、カーという奴隷概念、基盤となる概念の捉え方や定義等に甘さがあること、さらに、ラオスの歴史記述に誤記等があることなどが指摘された。さらに、調査対象が有する代表性について、より自覚的に記

すべきであること、理論の引用に際して、鍵概念(「共感覚」の使用)や文脈の読み込みのずれが存在することなどが複数の審査員から指摘された。そのほか、序章で設定された問題設定に対して、データの提示から分析を導く記述が若干弱いといった点も指摘された。一方、今後の刊行や研究の進展を踏まえて、いくつかの示唆が行われた。例えば第二部を中心に記されている「感覚の統合」は、平田氏としては統合されるべきという方向でとらえている。これに対して一名の審査委員からは、前半の戦略的エスニシティの記述に対して、後半では五感により統合された伝統文化を経験的身体で思いおこすという論旨となっており、本質主義を迂回したことになっていない、むしろ個別の芸能者の経験から様々なレベルでの状況に応じたエスニシティをつむぎだす点、そうした行動の中に視覚・聴覚以外の要素も重視される点をクローズアップしたらどうかという指摘があった。また別の審査委員からは、五感のなかで音と声を核とするようなラムの世界、旋律圏といった点から、全体を再考するべきではないか、またソーの人々にとってラム歌謡内のソーの「言語」の重要性を強調する際に、むしろモン・クメール語系特有の舌の動きといった身体性を通じて分析する方向性があるといった示唆がなされた。また、平田氏が有しているソーの人々の音源資料をきちんとアーカイブ化していくことが今後の貴重な社会的貢献になるといった助言が加えられた。

平田氏は、質疑には適切に答え、また、自らの分析や記述の不足部分を謙虚に認め、今後の研究を進展させるうえで、指摘された点を改善していき、引き続き人類学的観点から音楽をめぐる研究を展開していくと答えた。

以上、論文審査及び最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が学術的に重要な貢献をもたらすものであり、平田晶子氏に博士(学術)の学位を授与することが適切であるという結論に達した。